

ドナウ の 四季

2013年・春季号・No.18

名画との出会い:スペイン美術館巡り	小松 裕文	1
2014年小林研一郎ハンガリーデビュー40周年記念コンサート	盛田 常夫	2
闘わない闘病記 (2)	佐藤 経明	4
世界の中の日本ーハンガリーと日本の大学間交流ー	佐藤 紀子	5
東京アドベンチャー	ハイリンガー ビアンカ	6
私にとっての国際性	パリク ズィタ	7
留学生自己紹介		8
山田 有弥・益子 夢乃・一戸 宏介・牛山 綾・藤原 新治・遠藤 綾女		
日本人学校	升谷 泰士・島戸 崇文	13
みどりの丘日本語補習校	渡辺 理絵	14
スポーツ行事・運動サークル情報		16

名画との出逢い：スペイン美術館巡り

小松 裕文

近くて遠かった国・スペインを訪れる機会に恵まれた。嘗てハンガリーに駐在されていたご夫妻の招きで実現した。スペインは1985年に訪れたことがあるが、プラド滞在はたったの2日間だった。今回の旅行は美術館巡りとガウディ建築の見学が目的。

訪れた美術館はプラド美術館、ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルミネッサ美術館、王立サン・フェルナンド・美術アカデミー、王宮内ギャラリー(以上マドリッド)、カテロダル内聖具室、サンタ・クルス美術館、サント・トメ教会(以上トレド)、カタルニア美術館、ピカソ美術館(以上バルセロナ)。プラド美術館の所蔵品は絵画だけでも8000点を越え、有名な作品が目白押しだ。

ヒエロリスム・ボッシュ(1450-1516年)の「快樂の園」もその一つ。いつも作品の前は人だかり。三枚のパネルからなる三連祭壇である。左から「エデンの園」、「快樂の園」、「地獄」と名づけられている。シュールレアリスムの源流の画家の一人。現存する作品の数はそれほど多くなく、約30点。ウイーン美術アカデミー美術館の「最後の審判」の祭壇画の他、ウイーン美術史博物館、ミュンヘン・アルテピナコテック、ロンドン・ナショナルギャラリーで小品を見たことがあるが、今回のプラド美術館の作品は見ごたえ十分だった。

フラ・アンジェリコ(1395-1455年)の「受胎告知」に出逢えたのも嬉しかった。作者はフィレンツェのサンタ・マリア・デレ・グラツツィエ修道院の受胎告知を描いた作者と同じで、この絵はフィレンツ北部のフィエゾーレのサン・ドメニコ聖堂の祭壇画として描かれたもの。

「モナ・リザ」があったのは驚きであった。ルーヴルの本物よりは鮮やかで明るい、雰囲気はまったく同じ。バックの景色も本物よりは鮮明で輪郭もはっきりしている。2012年2月1日に修復を終え、始めて一般に公開された。プラド美術館の公式発表では、現存する模写作品では最も古く、ダヴィンチ本人のアトリエで制作されたものだが、ダヴィンチ本人はこの制作に関わ

っていない。3月26日からルーヴル美術館の本物の横に並べて陳列されたようだ。

アルブレヒト・デューラー(1471-1528年)の自画像に逢えたのは懐かしかった。2012年6月、ニュルンベルグのゲルマン博物館の「デューラー展」が思い出された。メインの展示としてデューラーの自画像が3点、22歳の自画像(別名アザミを持った自画像=ルーヴル美術館)、27歳の自画像(プラド美術館)、1500年の自画像(ミュンヘン・アルテピナコテック)が並べられていた。今回観たのはその中の内の一点。特別展「Martin Rico展」が開かれていた。それまで彼の名前を聞いたことがなく、未知の画家だった。覗いてみる程度の気持ちで会場に入ったが余りの素晴らしさにじっくり鑑賞する羽目になってしまった。



Rico(1833-1908年)はスペインの風景画家の中で最も重要な画家の一人、国外にも知れ渡っている。彼の作品の色(青い空、碧い海、濃淡のある緑)はその環境で生活しているものだけが描けるもの。又彼の作品の多くに人物がさりげなく描かれているが、それが極めて現実感を覚えさず。「学校の中庭」、「クロイエスで洗濯する婦人」は最も魅かれた作品である。子供やご婦人の話し声が聞こえてくるような雰囲気が醸し出されている。

ソフィア王妃芸術センターは1900年からの現代美術を集めた美術館。パリ万国博(1937年)のために描かれたピカソの「ゲルニカ」はこの美術館で最も名高い。作品の前はいつも多くの観客が集まっている。数年前までは写真撮影はOKだったが、今は監視員が常時警護している。ゲルニカの存在を知ったのは1960年代の前半。作家の有吉佐和子の夫・神彰氏社長の「アート・フレンド・アソシエーション」が企画したゲルニカ展(デッサンや写真)が名古屋で

開かれた時のこと。推測だが、現在この美術館に陳列されているデッサンが陳列されたのだろう。

1925年に描かれたサルバトーレ・ダリ若年の作品「窓辺の少女」が印象に残る。後姿の少女が湖を眺めている具象画だが、シュルリアリズムの「ダリの絵」からは想像できない清涼しい作品。

巨匠の若い頃の作品、即ち画風が確立していない頃の作品を見ることは楽しみであり驚きである。多くの場合作者の天才ぶりに触れることができる。今回の美術館巡りでも前述のダリの外、バルセロナのピカソ美術館にあるピカソ15~16歳の時の作品「初聖体拝受」、「科学と慈愛」は「ゲルニカ」を描いたピカソの作品とは思えない。教会や病室の重々しい雰囲気画が画面から伝わってくる作品だった。

ティッセン・ボルネミッサ美術館のコレクションは個人としてはエリザベス女王に次いで世界第2位。16世紀のイタリア美術からスペイン現代作家まで多種多様。印象派の作品も数点ある。

エゴン・シーレの母親の故郷チェスキー・クルムロフを描いた作品。エドワルドムンクの若き頃の作品など、楽しめる美術館だ。

エル・グレコを観るならトレドの町。小さな町のあちこちでグレコに出会える。サント・トメ教会には「オルガス伯爵の埋葬」がただ一点展示されている。部屋は小さく、この作品を見るために観光客は順番待ちの状態。入場料も必要である。

カテドラル内の聖具室は美術館になっており、グレコの「聖衣剥奪」の朱色の衣服画ひととき目立つ。兵士に衣服を剥ぎ取られキリスト受難の場面。グレコの最高傑作の一つ。

サンタ・クルス美術館には22点のグレコの作品がある。「聖母受胎」、「聖母昇天」の代表作は日本で開かれているグレコ展に貸し出し中でお目にかかれなかった。

(こまつ・ひろふみ)

温熱治療のパラダイムを転換する

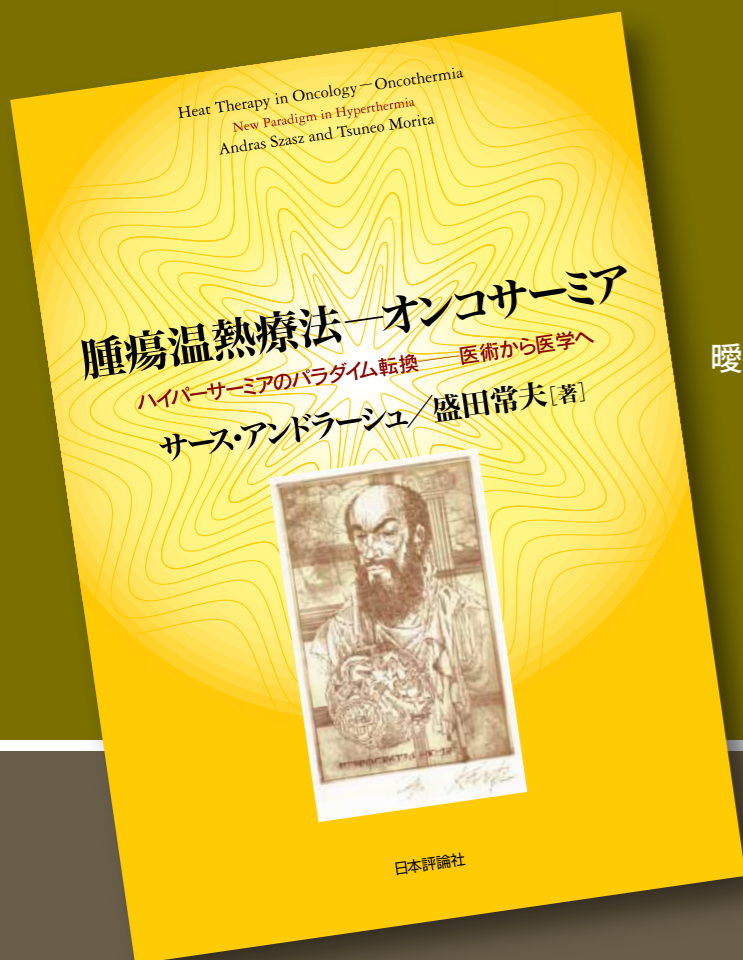
温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存(NTD)効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却：リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量(ドーズ)



- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場(コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量(ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

2014年小林研一郎ハンガリーデビュー40周年記念コンサート

盛田 常夫

「炎の指揮者コバケン」こと、小林研一郎の指揮者としての国際デビューの地はハンガリー。ハンガリーテレビ主催「第一回国際指揮者コンクール」(1974年)で優勝して、来年でもう40年になる。これを祝うコンサートシリーズのプログラムがほぼ確定したのでお知らせしたい。まだ1年先の話だが、コンサートプログラムや会場の確保は2シーズン先まで予定が組まれるのがふつうだから、1年という時間は会場を押さえる時期としては、ギリギリの時点なのである。

「コバヤシ・ケンイチロウ」はハンガリーでもっとも名が知られる日本人である。ハンガリー政府が全世界で5名を指名した「ハンガリー文化大使」の一人。音楽に素人の私は、いろいろな経緯があって、コバケンのハンガリーにおける音楽活動を裏方として支えてきた。恒常的なサポーターがないと、外国で芸術家が活動を続けて行くのは難しい。せっかく「コバケン」という日本の代表選手がいるのに、それを持ち上げなければ、「宝の持ち腐れ」になってしまう。しかし、大使館であれ企業であれ、駐在員は数年で日本に戻ってしまうから、継続的なサポートは難しい。当地に定住している者が支える以外に方法ない。願わくは当地に進出している日系企業が、ハンガリーと日本の文化交流の重要な絆として、コバケンの音楽活動を支援する姿勢を示して欲しいものだ。

こういう思いがあって、1994年にデビュー20周年、2004年にはデビュー30周年を祝う会を組織した。来年の40周年はさらに大きな節目として、コバケンのハンガリーでの活動の総決算となるような企画を目指している。各コンサートチケットの入手は発売とほぼ同時に売り切れることが予想されるので、クラシックファンの皆さんの注意を喚起しておきたい。

20周年記念パーティ

1994年3月、開業間もないケンピンスキーホテルにて、20周年記念行事を行った。当時、コバケンはハンガリー国立フィルハーモニーの音楽監督という重職を担っていた。巨匠フェレンツ・ヤーノシュ亡き後の国立フィルの音楽監督に、団員の投票で常任指揮者に選任され、その後音楽監督の地を得た。1987年から1997年までの10年にわたって、ハンガリー国立フィルハーモニーを率いてきた。

このパーティを組織するにあたって国立フィルのメンバーと話し合い、楽器グループごとに小演奏を行うことでお祝いに代えようということになった。午後7時30分から始まったコンサートは、深夜近くまで繰り広げられた。170-80名ほどのテーブル席のほかに、早稲田グリークラブのメンバー70名ほどが終始壁際に立ちっ放しという大盛況だった。国立フィルメンバーによる工夫を凝らした演奏が第一部。休憩中には、出版されて間もない『指揮者のひとりごと』(騎虎書房、1993年12月)のサインセールが行われた。第二部ではコバケンがカンツォーネを歌い、ピアニストの小林垂夫乃さん(お嬢さん)と加藤洋之君がそれぞれソロ演奏し、最後はグリークラブと国立フィルをバックに、コバケンが「アカシヤの径」を歌って幕となった。思い出に残る楽しい音楽会だった。

このパーティの様子はDUNA TVのクルーが撮影し、その後50分の番組に編集されて繰り返し放映された。今でもこのビデオを見ると、20年前の懐かしい記憶が蘇ってくる。とにかく、コバケンを含めて、皆若かった。コバケンが中学生時代に作曲した「藤棚の下で」という曲を、ソプラノ歌手パスティ・ユーリアがコバケンのピアノ伴奏で歌った。2011年5月にマーチャーシュ教会で震災チャリティコンサート(モーツァルト「レクイエム」)を行った時に、彼女がリスト音楽院の学生の中からソリストを選んでくれたのだが、17年ぶりに会場で顔を合わせた彼女は、面影がないほどに老けていたのにびっくりした。私と同年だから、他人のことは言えないが、この再会をきっかけに、彼女をホームコンサートやクリスマスパーティなどに招き、歌ってもらっている。素人の私とドゥエットまでしてくれる。彼女の娘、Karosi Júliaはジャズ歌手として活躍していて、彼女のバンドにクリスマス演奏を依頼している。

横道にそれたが、とにかく、この20周年の集いは楽しかった。当地の日本商工会傘下の会社の代表者もほとんど参集された。ただ、パーティ費用を捻出するのに苦労した。懇意にしていた1社を除き、スポンサーはゼロだったからである。苦肉の策として、当時としてはかなり高額なパーティ券を個別に買っていただき、30万円程度の資金を集めたのを覚えている。ケンピンスキーホテルも、会場を無償で提供するなどの便宜を図ってくれたが、200名を超える参加者の飲食をこの予算で提供するのは無理があり、グリー



クラブのメンバーを夕食なして4時間も立たせてしまい、悪いことをした。TVクルーからも撮影途中で、食事や飲み物を催促されて困ったのを覚えている。

そういう苦労はあったが、このパーティは盛会のうちに終わった。それにしても、こういう時にはもっと日系企業の支援があっても良いと思うのだが、そういうことを意識され費用の心配をしてくれたのは、わずかにトーマンの天野所長だけだったのを覚えている。

30周年記念コンサート

30周年のお祝いは2004年10月に行われた。前回の苦い経験から学び、コンサートとパーティを別にした。パーティは関係者のみに限定し費用を日本商工会の寄付金で賄い、コンサート経費は国立フィルの負担と決めた。コンサートは招待ベースとし、500名程を招待した。

会場はハンガリー科学アカデミー本部の大ホール。国立フィルからは弦楽器演奏と音楽監督コチシュのピアノ演奏、それに国立合唱団、ハンガリーラジオ児童合唱団に加わってもらった。当地の日本人演奏家からピアノの関野直樹君、歌の坂井圭子さん、リスト音楽院の日本人とハンガリー人で構成するMAJA弦楽四重奏が演奏した。

開演前の挨拶が長くなったが、多彩なプログラムが構成された。児童合唱団には事前に「アカシヤの径」を練習してもらった。私が何度か音楽学校の練習場に通って、マエストロの代わりに歌い、合唱との合わせを行った。また、10年前の会でパスティ・ユーリアが歌った「藤棚の下に」を坂井さんが歌い、児童合唱団は「夏の思い出」を歌ってくれた。天皇陛下ご夫妻のハンガリー訪問時にも、児童合唱団が国立ギャラリーでこれを歌って出迎えたようだ。合唱団の歌唱が終えた後、マエストロから即興の合唱指導があり、一瞬で曲想が変わる魔術を見せられ、会場が沸いた。最近、再び、児童合唱団の「夏の思い出」を聞く機会があったが、一本調子の平板な「夏の思い出」に逆戻りしていた。

児童合唱団には日本人学校校歌(小林研一郎作曲)も歌ってもらった。当初は日本人学校の児童に歌ってもらおうと企画していたが、夜が遅くなるという理由で父兄の賛同を得られなかったようだ。貴重な機会だったと思うが。

この記念コンサートはビデオで撮影する準備をしなかった。今から考えると、何とも残念である。

40周年記念コンサートシリーズ

昨年来、いくつかのオーケストラやリスト音楽院バッタ学長に、40周年行事の話を持ちかけていた。バラバラにコンサートを開くより、一連の記念コンサートシリーズとして開催した方が良いので、期日を合わせようと。諸般の事情を考慮し、記念コンサートシリーズは2014年3月ということになった。

コバケンが東京のコンサートを終えてハンガリーに到着できる一番早い期日が3月10日。そこからコンサート日程を組み始めたが、すでに芸術宮殿は予約で埋まっており、3月20日を過ぎると、春の音楽祭のために、すべての音楽会場は音楽祭事務局が押さえてしまっている。そこで、関係者がいろいろ掛け合い、会場の交換や変更、春の音楽祭事務局との交渉を通して、以下のようなコンサート日程が決まった。まだ仮のプログラムではあるが、この日程にしたがって、これから詳細を詰めることになる。

コンサートチケットは主催オーケストラが販売するので、インターネットを通して購入していただきたい。数が多い購入であれば、事前に確保することはできるので、お知らせいただきたい。

3月14日 マーラー「復活」 国立フィル・国立合唱団
リスト音楽院ホール
ソプラノ:サボキ・トュンデ アルト:ヴィーデマン・ベルナデッテ

3月19日 オルフ「カルミナブラーナ」、
チャイコフスキー「ロココ協奏曲」芸術宮殿
ラジオオーケストラ・合唱団 チェロ:ペレーニ・ミクローシュ

3月22日 プログラム未定 ペーチ・バルトークホール

3月26日 ベートーヴェン「第九」、小林研一郎「パッサカリア」
リスト音楽院オケ リスト音楽院ホール

3月30日 ベートーヴェン「エロイカ」ほか
ジュールオケ ショブロン音楽ホール

3月31日 同 上 ジュール・バルトークホール

4月3日 チャイコフスキー「悲愴」ほか MAVオケ
リスト音楽院ホール

(もりた・つねお)



闘わない闘病記 (2)

佐藤 経明

同じ日の朝に入院して夕方には退院するという、異例の経過には次のような事情があった。今の住所に引っ越して以来、40年の付き合いのある近所のクリニックでのバリウム撮影で「胃に何か大きな異物がある」ことが発見されたのだが、この先生が紹介状を書くと言ったのは、多摩の丘の上に居を構える聖M医大病院だった。この先生が虎の門病院の「本院は良いが分院は悪い」といつも口にしてきたのは承知していたが、この時も同様だった。聖M医大の水準に危惧が無いわけではなかったが、何しろ40年の付き合いである。いま区役所の近くで皮膚科クリニックを開業している慈恵医大出の娘さんは私の娘の2~3歳下で、昔は娘が毎朝連れて小学校に登校していた間柄でもあった。

そこで11月7日早朝、同病院に入院したところ、ただちに胃カメラ検査の後、14-15日に手術する、手術室も押さえたとの告知を受けた。さて、それからが「本番」である。いったん帰宅した娘が夕方、母親を伴って病室に来て「すぐ帰りましょう」と強力に主張した。

娘の主張の理由は次の通りでした。
 (1) まず第一にひどく怒ったのは、患者の私には同日中に「14-15日に手術を予定、手術室も押えてある」と知らせながら、家族には何の説明も無いことだった。
 (2) M医大の医師の水準に疑問なしとせず。教授・准教授を除き「学会専門医・指導医」の認定を受けた人がいない。私の主治医に指定されたいF教授は琉球大学医学部卒だが、その他ほぼ全員がM医大卒。
 (3) 「陸の孤島」のようなアクセスの悪

さ。82歳の家内にはとても通えない。
 (4) 娘と同じ三軒茶屋在住、同世代ということで親しくしている女性眼科医(三軒茶屋育ち。学芸大附属中・高から日本医科大学卒)に「M医大病院? 止めたほうがいいわよ」と言われたこと。
 (5) 娘たちの世代は「男女均等法」世代ですから、「誰から紹介されたから」などには拘泥しません。「患者の権利」を真正面から押し立てます。後で分かったことだが、15-16年前、虎の門病院本院で回復期に入った患者の予後センターとして開設された分院が外来患者を診始めた時、地元医師会と大変なトラブルがあったと言う。私のクリニックの先生は開業した時期が早かったから地元医師会の重鎮としてトラブルの先頭にあつたらしい。分院に対するこの先生の「敵意」も納得できた。私が住む田園都市沿線、宮崎台・宮前平から鷺沼にかけてのクリニックの医師たちが聖M医大病院ばかり紹介する理由も、良く分かったのである。これには開業した親の世代に代わる息子・娘には、このM医大卒が多いという事情も手伝っているらしい。

翌8日、早速、近く虎の門病院分院を訪れた。最初に應對してくれたのは本院下部消化器外科部長の黒柳洋弥先生(腹部を切開しない腹腔鏡手術で全国トップクラスの実績あり)。ヒゲ面の笑顔で應對、「私は大腸癌専門だから」と上部消化器外科専門の上野正紀本院医長にその場からケータイで電話連絡、10日木曜日午後の診察を確保してくれた。その間28歳くらいらしい百瀬洗太さんという、いかにも秀才の青年医師が院内PHSとパソコンで各所にて

きばきと連絡、もう夕方近かったのにその日のうちにCT造影スキャンを含む三つの検査を押し込んでくれました。

検査は翌日9日早朝の胃内視鏡(胃カメラ)がメインでしたが、これも百瀬医師が手配してくれた二人の医師により40分もかけるといふ徹底したものでした。M医大病院の通り一遍の内視鏡検査とは大違い、「患部の向こう側の境界線ははっきりしているけれど、手前のほうがはっきりしないから、もう少し我慢してください」などと言うのを聞きながら検査を終えました。

黒柳先生と、二日後にお会いすることになる上野先生のお二人とも患者に対しM医大教授のように荒っぽい話し方でなく、誠に市民的で患者を対等に扱う礼儀正しいものでした。

教訓2の1 医師・病院の選択に当たっては、義理人情に囚われてはならない。「患者の権利」を真正面から押し立てること。セカンド・オピニオンを求めるのも患者の権利である。

教訓2の2 ということは、患者も無智であってはならないということでもある。高度医療が普遍化してきた今日では、どこの病院では(どんな医師がいて)どのようなジャンルで業績をあげているかをおよそ知ることなしには、みすみす命を失い兼ねないのだ。「バカでは患者は務まらない」時代となったのである。
 (さとう・つねあき 横浜市立大学名誉教授)

世界の中の日本 —ハンガリーと日本の大学間交流—

佐藤 紀子

「複雑多様化する21世紀の世界において日本人はどのように行動すべきか」、「女性が社会でリーダーシップを発揮するためにはどのような課題を解決していかなければならないか」

これらの問いへの答えを求めて3月6日から12日まで城西大学、城西国際大学の大学院生・学部生30名がブダペスト商科大学(BBS)で研修を受けた。

BBSと学校法人城西大学は、2007年から留学生や日本語教育実習生の受け入れを相互に行っている。BBSではマルチナショナルなメンバーによるチームビルディングの実践的トレーニングとなる協働作業を経験することを特に重視している。今回新しく企画された「世界の中の日本」研修でも、学生が行動を共にしながら協働して成果発表を準備した。

3月6日昼前にブダペストに到着した研修団は、ホテルで休憩する間もなくすぐに開会式に臨んだ。その後、筆者による第1回目の講義「言語・文化・コミュニケーション」を聴講。学生達は、「日本人とは」、「日本文化とは」という異文化コミュニケーションの根幹ともなる問いかけに長旅の疲れも見せず活発に反応してくれ、今回の研修にかかる意気込みが大いに感じられた。夕食は大学近くの地元レストラン。これぞハンガリーというフルコース大盛り料理をなんなく平らげた女性が何人もいたのにはさすが女性リーダーの卵と感心した。

翌7日は、女性リーダー育成奨励生9名がクリスト・エーヴァBBS学長(全国国立大学総長会議共同議長)にインタビュー。女性がリーダーシップを取るためにどのような課題を解決しなければならないか聞き取り調査した。学長は、「女性がリーダーとして成功するには、短期長期の確かなキャリアプランの策定、人生への柔軟な対応、情熱、周りの人と情報を共有し協力し合うこと、責任感と精神的肉体的なタフネス、そして自分自身を信じる必要がある」と語

った。外見からも少々「鉄の女」の風貌がある学長の言葉は、職業人、妻、母親という役割を柔軟にこなしながら活躍してきた学長そのもののように感じられ、大変説得力があった。

その後、美術史家のゲッレール・カタリン氏の講義「19世紀から20世紀にかけてのハンガリー美術におけるジャポニズム」



ハンガリー人学生日本語によるスピーチ

を聴講。100枚にも及ぶスライドで日本の浮世絵がハンガリー美術に与えた影響をじっくりと学ぶことができた。午後は市内に出て世紀末建築様式などのフィールドワーク。8日は、午前中メラニー・スミス氏(BBS)の「ハンガリーにおけるヘルスツーリズム」とセーカーチ・アンナ氏(BBS)の「ヨーロッパとハンガリーにおける日本とは」を聴講。午後は、ゲッレール温泉を訪れ、ハンガリーのヘルスツーリズムを実際に体験した。これらの成果は「日本とハンガリーの建築様式・美術についての比較研究」という発表にまとめられた。

9日は午前中シュディ・ゾルターン元駐日大使による「日系企業のハンガリー進出」と盛田常夫氏(立山研究所)の「欧州経済と労働問題」の講義を聴講。いずれの講義でも学生達から多くの質問が出され、研究意欲の高さが感じられた。午後からは、ハンガリーにおける日本文化の受容を知るために工芸美術館とホップ東洋美術館を学芸員の案内で見学。工芸美術館最上階にある収蔵庫で一般には非公開の日本の工芸美術品の数々を鑑賞する機会を得た。

また、10日には美術館で日本をよく知るハンガリー人6名とハンガリーに住む日本人4名にインタビューし、「世界の中の日本と日本人、個の確立を目指して」と題した報告にまとめた。

そして、いよいよ11日。山本忠通駐ハンガリー大使、安田国彦一等書記官、三宅翔太国際交流基金ブダペスト事務所副所長をお迎えし、成果発表会が催された。まず、BBSの学生が今年ハンガリーで初めて放映された大河ドラマ「篤姫」についてフェイスブックでハンガリーの若者にアンケートした結果を「世界の中の日本—『篤姫』とハンガリー」という題でまとめ、日本語でスピーチした。その後、参加者達は5日間毎日寝る間も惜しんで準備した成果報告を緊張の中にも堂々と英語で発表した。

最終日は外務省にオルバーン・アニタ、エネルギー安全保障担当大使を訪ねた。外務省最上階にあるパノラマルームで迎えて下さった若くエネルギッシュな大使からは、1時間にわたる懇談会の中で、女性がリーダーになるためには中長期の目標をしっかりと定め、その目的に向かって全力で行動するようにとの心強いメッセージをいただいた。学生達にとって忘れがたい思い出になったと思う。

日本文化の力、日本文化を熟知した国際人というソフトパワーこそ、これからの日本に必要とされるパワーである。今回の研修は、個性や創造力が評価されるハンガリー社会で日本文化が賞賛されてきた歴史を知ることで、多文化グローバル社会で能力が発揮できる日本人とはどのような人材かを考えるよい機会になったと思う。

尚、本プログラムに関しては学校法人城西大学のHPでも詳細が報じられている。
<http://www.josai.jp/news/2013/20130305.html>

(さとう・のりこ ブダペスト商科大学)

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。

<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



東京アドベンチャー

Hajlinger Bianka

以前、東京を訪ねた知り合いが「東京は大して面白くない街だ」とガッカリしていました。確かに、都心には近代的な高層ビルが多く、銀座やスカイツリーだけで観光が終わると面白くないと感じたんでしょう。しかし、東京はそれだけではないと思います。そこで、私が今まで見た、風変わりなインパクトのある観光スポットを紹介したいと思います。

東京は京都や奈良に比べると昔の建物は少ないものの、興味深いお寺や神社が数多くあるので、寺院と神社巡りを楽しみながらかつての江戸の歴史、文化やにぎわいを味わう事ができます。

まず思い浮かぶのは国内のみならず世界的に名高い観光地である浅草寺です。628年に建てられたお寺で、都内最古の寺院といわれています。江戸時代に幕府の祈願所に指定されたため、浅草寺の辺りは下町を中心として栄えました。浅草寺の見どころの一つは浅草全体のシンボルとなった雷門です。雷門をくぐった先の仲見世通りに数え切れないほどのお店が並んでいて、いつも観光客でにぎわっています。仲見世通りの人ごみを抜けて、宝蔵門をくぐるとお寺の中心の本堂や、五重塔、伝法院などを見物できます。浅草寺のライトアップも印象的な光景です。

東京の葛飾区にある柴又帝釈天も見どころが非常に多いお寺です。柴又は映画「男はつらいよ」の舞台になったことで多くの人に親しまれています。柴又駅から少し歩くとお寺へ向かう帝釈天参道に着きます。下町雰囲気がある参道に駄菓子、草もちや色々なお土産を売っているお店が軒を並べていて、昭和レトロを満喫できます。柴又帝釈天のハイライトは随所に見られる木彫刻の数々なので、じっくり時間をかけて見てまわるのがポイントです。お寺の入り口の二天門や帝釈天本堂や関東一の鐘楼(しょうろう)と賞される大鐘楼の彫刻も印象的ですが、彫刻ギャラリーで見られる彫刻の奥行きや深さとディテールの細かさに本当に驚かされます。彫刻の他に、大客殿とその前に広がる遼溪園(すいけいえん)という庭園が見所です。

また、都会の雑踏的な雰囲気に対して静穏で色鮮やかな神田明神や、自然豊かな深大寺やインドとヨーロッパ建築の特徴が混ざったような築地本願寺なども是非見てみたい所です。

東京にはまるでここが日本ではないような異国情緒に満ちている珍しい建物もあります。その建物とは御茶ノ水にあるニコライ堂(正式名所:日本ハリストス正教会東京復活大聖堂)という東方



正教会の教会です。明治24年(1891)に建てられて、建築のスタイルは東ヨーロッパの教会に一般に見られるビザンチン様式で、中心に玉葱型ドームがそびえ立っています。カトリック教の十字架と違うロシア十字架や漢字で書かれた聖書を持っているキリストの画など面白いディテールにもあふれています。ニコライ堂の中に入ってみると、正面にたくさんのイコノスタス(聖画像)が飾られていて、四方に大きいステンドグラスがあって、淡い輝きがとても印象的です。「東京にこんな場所があったんだあ」と感動する観光地です。

お寺や教会巡りの気分転換に買い物を楽しみたい時に神田の神保町に出掛けてみるのもいいと思います。世界最大級といわれる古書店を中心とした書店街として知られている神保町にはありとあらゆるジャンルが揃っているので、本や雑誌を眺めながら楽しい時間を過ごせます。

一方、都心の雑踏から少し解放されたい場合、東京都八王子市にある高尾山がぴったりだと思います。新宿から約50分で行ける、都心に近い場所でありながら、豊かな自然に囲まれて山歩きができるのは高尾山の魅力の一つです。高さ約600mで初心者も気軽に登れるハイキングスポットですし、どの季節でも見所が満載で、紅葉や桜の時期にも絶景を楽しむ事ができます。更に、高尾山の山腹に薬王院という、1200年以上の歴史がある寺院や様々な神社が広がります。精密な彫刻で飾られている本堂や本殿、インド風な仏舎利塔、色々な所に見られる山の妖怪、天狗の像、面や天狗“雑貨”が印象的です。高尾山から下山して、高尾山口駅の近くにあるトリックアート美術館(だまし絵の美術館)に寄ってみてもいいのかもしれません。

そして最後に、都内から日帰りで行ける面白いお出かけスポットを紹介したいと思います。まずは横浜の代表的な観光地、赤レンガ倉庫と中華街。赤レンガ倉庫は倉庫として使われていた歴史的建造物を利用したショッピングモールで、レトロな雰囲気と横浜の海をのぞむ風景が魅力です。横浜中華街に行けば、中国本場の活気ある雰囲気と、おいしい中華料理を味わえることができます。それから、武家の古都、鎌倉。人気がある観光地で、鎌倉大仏で有名な高徳院、鶴が丘八幡宮や銭洗弁財天などなど1日でまわりきれないほどのお寺や神社があります。そして、小江戸とも呼ばれる埼玉県川越。江戸情緒にあふれる蔵造りの町並み、川越のシンボルである時の鐘や、色とりどりの手作り飴や駄菓子や売っている下町風のお店が並んでいる菓子屋横丁がとても印象的です。

まだまだ他にも見所がたくさんあります。皆さんも機会がありましたら、是非東京を冒険してみてください。

(ハイリンガー・ビアンカ)

私にとっての国際性

Palik Zita

みなさんは国際性という言葉聞いたことがあると思います。でも、それは実際にはどういう意味なのでしょう？

私は去年の9月から、京都の立命館大学で留学生として日本語を勉強しています。日本に来てから毎日、日本人だけではなく、世界の各地から来た留学生と一緒に生活しているので、各国の様々な文化・習慣を知るようになりました。そのような状況で、数週間前に「温かいスープ」というエッセイを読み、初めて国際性という造語を見ました。

「1957年、私はパリで大学の講師を勤めていた。しばらくはホテルにいたが、主任教授の紹介状で下宿が見つかり、訪ねあてたところ、その主婦は、私が日本人だと知るや、「夫の弟がベトナムで日本兵に虐殺されているので、あなた個人になんの恨みもないけれど、日本人だけはこの家に入れたくないのです。その気持ちを理解してください。」と言い、私が下宿するのを断った。しかたなく、大学が見つけてくれた貧相な部屋のホテル住まいをすることになった。

そのころの話である。私は平生は大学内の食堂でセルフサービスの定食を食べていたが、大学と方向の違う国立図書館に調べに行くと決めていた土曜は、毎晩、宿の近くの小さなレストランで夕食をとるほかなかった。その店はぜいたくではないがパリらしい雰囲気があり、席も十人そこそこしかない小さな手作りの料理の店であった。白髪の母親が台所で料理を作り、生粋のパリ美人という感じの娘がウェイトレスと会計を受け持ち、二人だけで切り盛りしていた。毎土曜の夕食をそこでとっていたから、二か月もすれば顔なじみになった。

若い非常勤講師の月給は安いから、月末になると外国人の私は金詰りの状態になる。そこで月末の土曜の夜は、スープもサラダも肉類もとらず、「今日は食欲がない。」などと余計なことを言っただけで、いちばん値の張らないオムレツだけを注文して済ませた。それにはパンが一人分ついてくるのが習慣である。そういう注文が何回かあって気づいたのであろう、この若い外国生まれの学者は月末になると苦労しているのではあるまいか、と。

(中略)その後、何ヶ月かたった二月の寒い季節、また貧しい夜がやって来た。花のパリというけれど、北緯五十度に位置するか

ら、わりに寒い都で、九月半ばから暖房の入るところである。冬は底冷えがする。その夜は雹が降った。私は例によって無理に明るい顔をしてオムレツだけを注文して、待つ間、本を読み始めた。店には二組の客があったが、それぞれ大きな温かそうな肉料理を食べていた。そのときである。背のやや曲がったお母さんのほうが、湯気の立つスープを持って私のテーブルに近寄り、震える手でそれを差し出しながら、小声で、「お客様の注文を取り違えて、余ってしまいました。よろしかったら召し上がってくださいませんか。」と言い、やさしい瞳でこちらを見ている。小さな店だから、今、お客様の注文を取り違えたのではないことぐらい、私にはよく分かる。

こうして、目の前に、どっしりしたオニオングラタンのスープが置かれた。寒くてひもじかった私に、それはどんなにありがたかったことか。涙がスープの中に落ちるのを気取られぬよう、一さじ一さじかむようにして味わった。フランスでもつらい目に遭ったことはあるが、この人たちのさりげない親切ゆえに、私がフランスを嫌いになることはないだろう。いや、そればかりではない、人類に絶望することはないと思う。

出典:光村図書発行「中学三年国語」(一部抜粋)

このエッセイは美学者・中世哲学研究者の今道友信によって書かれたもので、著者はフランスで働いていたときの経験を基にして国際性の大切さを強調しました。著者によると国際性は、流暢な外国語の能力や、事業の規模や、学芸の才気などとは関係がありません。むしろ、お互いの文化・習慣・歴史を敵愾心なく思いや

つて、人種に関わらずお互いが「人類」という仲間だという自覚を持つことが、国際性の基本です。例えば、その「温かいスープ」では、金詰まりになった著者に対して、あるレストランを営んでいる親子が見返りを求めずにオニオンスープをあげました。これは、無償の愛、そして人類愛の良い例です。

そのエッセイを読んで、私にとって国際性とはどのようなことか、色々考えました。私は日本に着いた日から、初めて家族や仲のいい友達の手

伝いなして新しい生活、習慣、礼儀に慣れ親しまなければなりません。初めの頃はどうすればいいかなどいつも緊張して神経が高ぶっていましたが、日々が過ぎ去るにつれて、ものごとが簡単になってきました。すでに最初の日にはオーストラリア、マレーシア、ブラジルなど様々な国から来た若者と出会いましたが、みんな、私と同じような緊張、悩みを持っていて、静かにお互いの顔を盗み見ていました。彼らもどうすればいいか、何を言えいいか全然分からないようだ、と思って、やっぱりみんな同じだと感



じました。そのような共通点のおかげで、私達は思いがけずお互いに固い友情の絆で結ばれるようになりました。その友情の中では、国籍、宗教、学歴に関わらず、人はみな、平等でした。「自分と同じような問題に直面する友達は、自分と一緒にだ」という気持ちをみんなが持っているの、見返りを求めることなくお互いを手伝っています。それは国際性の例の一つだと言えるでしょう。

しかし、初めて国際性という言葉聞いたときに私が思い出したのは、他の体験でした。私は日本に来て1週間目に区役所に在留カードと健康保険証を申請しに行かなければなりませんでした。その頃はバスがどちら側を走るかさえ分かりませんでした。それで、区役所の人の言いたいことや申請書の記入のやり方などが分からなくて困るんじゃないかと恐れていましたが、幸い、そんなことは起こりませんでした。どうしてかという、私が通っている立命館大学では、留学生を援助するためのSKPバディーという学生会があ

るのです。その会では、留学生が日本での滞在を楽しめるように様々なイベント、パーティー、飲み会を主催したり、悩みや問題があったら相談に乗ったりする日本人の学生がいて、色々手伝ってくれます。区役所に行くべき日にも三人のバディーたちが私達を連れて行ってきて、申請書の記入を手伝ってくれて、カードが届いたら何をしなければならぬか説明してくれて、本当に助かりました。その三人の援助がなかったら何もできなかったかもしれません。今でも日常生活において色々忠告してくれて、とてもありがたいです。私にとって彼らの無償の援助こそが国際性の事例です。

重要なのは、平凡な生活の中で、小さいことでもお互いに見返りを求めずに手伝ったり助けたりすることで、よりよい世界のために少しずつでも実践していかなければならないと思います。

(パルク・ズィタ)

留学生自己紹介

第二の故郷

デブレツェン大学医学部4年

山田 有弥

「海外で、英語で医学を学びたい」これが私のハンガリー留学を決めた原点です。幼少の頃家族で訪れた写真展で見た、世界の貧困地域で活躍する医師の姿が頭から離れず、母の病を通して医師という職業の素晴らしさを知り、その決意は固いものになりました。

デブレツェン大学医学部の英語プログラムは、学費も安く、かつ高レベルの教育が受けられ、私の理想の医師像に近づくにはここしかない、と半ば運命的なものを感じつつ、思い切ってデブレツェンへ来てから早5年が経とうとしています。

初めての海外、初めての一人暮らしと、見るもの聞くもの全てが新鮮な私のハンガリー生活は、3カ月の英語研修から始まりました。昔から英語の勉強は好きでしたが、日本で学ぶ英語とコミュニケーションをとることとは違い、まず相手が何を言っているかが分からない、理解できても自分の言いたいことが表現できない、という悔しい思いを数え切れない程経験しました。でも今思えば、この「悔しい」という気持ちが、語学上達で一番重要なかもしれません。授業や外国人の友人との関わりの中で、知りたいと



比べて、やはり英語にディスアドバンテージのある日本人は、120%準備していったら100%の力が出せるといった感じです。昔はそのことがコンプレックスになっていましたが、4年になった今は、基礎医学をやっておいたことが活かされていると実感して

います。

日本の病院で実習すると、必ず指導医の先生方に、同じ学年の日本の医大生よりも優秀だとお褒めの言葉を頂くのは、試験があれだけ厳しかったからだと思います。努力せずに、人の生命を預かることはできないと、厳しい進級制度を通して、教授たちは学生に教えているのだと思います。

高学年では、病棟で患者さんを診させて頂きながら授業をすることがほとんどです。ハンガリー語で患者さんと話すのはとても難しいですが、基礎医学の知識を思い出しながら診断や治療を考えたりするのは面白く、「勉強頑張ってるね」と励ましてくれる患者さんもいたり、毎日充実した日々を送っています。

ブダペストで初めて王宮や鎖橋の夜景を見たときの感動は忘れられません。また、オペラや美術、荘厳な建築物など、日本ではなかなか触れることのできない一流の芸術にも、心を洗われます。

デブレツェンは、ブダペストに比べれば小さな都市ですが、ハンガリー人・外国人共に学生が多く、田舎過ぎず都会過ぎず、学生が勉強するには最適な街だと思います。日本人の医学生も今は60人近くまで増え、全く孤独になってしまっとうしようもなく日本が恋しいなんてこともありません。食事は、レストランやファーストフードを利

留学生自己紹介

用している人もいますが、私はたまに日本に帰った時に日本の調味料を沢山持ってきておいて、基本的には自炊をしています。新鮮なお魚はあまりありませんが、お肉や野菜は日本にあるものと似ているので、和食も割と作れます。

私は勉強の息抜きによく散歩をして、ヨーロッパで医学を学べる幸せをかみしめ、原点を確認しながら、毎日を過ごしています。ハンガリー人の友人やクラスメートと、お互いの国の料理を一緒に作って語り合うのも大きな楽しみです。

私は、ハンガリーに来たのは正しい道だったと確信しています。

確かに勉強は大変で、進級も難しいですが、自分が何のためにここに来たのかということを見失わず、努力していけば、必ず上の学年に上がっていきます。何より英語で学べるといことは、それだけ可能性が広がるということです。

将来は、日本の医師免許も取得し、日本・世界の医師を必要とする地域にどこへでも飛んでいけるような医師になりたいと思っています。

卒業しても、ハンガリーはずっと私の第二の故郷です。ここへ来てくれた両親と、応援してくれる方々への感謝の気持ちを忘れず、これからも頑張っていきます。

(やまだ うみ)

私のAnother Sky

ハンガリー国立バレエアカデミー

益子 夢乃

私が初めてハンガリーにきたのは16歳の時でした。一人旅の飛行機では、これからどんな生活が始まるのだろうと、不安な気持ちでいっぱいでした。日本からハンガリー行きは直行便はないので、乗り換えなどが私にとって一つの壁でした。ハンガリーに到着し、空港からアパートに向かいました。アパートは一人暮らしにはもったいないほど、広くて、でもとてもおしゃれで気に入りました。

学校が始まる数日間は毎日お母さんたち

と話し、ホームシックがとにかくヤバかったです。何回、「帰ってもいい？」って聞いたかとか…。自炊、洗濯、買い物など、慣れない



いことばかりで、日本でお母さんが当たり前のように毎日やっていたありがたみを感じました。学校には地下鉄で5-6分着くので通学はとても楽です。学校はスタジオが12個もあって舞台もあって、衣装部屋には数えきれない衣装があって素晴らしい環境だなと思いました。初のハンガリーでのクラスはすごく緊張しました。私はとても小柄なので、留学する前から覚悟はしていたんですが、とりあえずみんなの背の高さにビックリ！そして足がきれい！どうしても自分と比べてしまいました。

ハンガリーに来て、とても舞台経験が増えました。一年目の冬のくるみ割り人形の舞台では中国の踊りを踊らせてもらいました。見に来てくれたお客さんは、「おめでとう！」「よかったよ！」など声をかけてくれて、ハンガリー人ってとても温かいなと思いました。それからも地方公演などいろんな舞台を経験させてもらいました。驚いたのは、一度小さなカンパニーのモダンの作品に出させて頂いたときに、お給料が支払われたことです。こちらが出させてもらってお礼を言いたいぐらいなのに…。日本では考えられないなと思いました。その自分がもらったお金でアパートのガス代電気代を支払えたこ

とがすごくうれしかったです。

春休み前に毎年校内コンクールが開催されます。自分の個性にあった踊りをみせるいい機会だなと思います。去年の校内コンクールではみんなで力をあわせて団体作品で一位を頂き、ガラにまで出させてもらいました。舞台やコンクールの他には、年に二回試験があって、バレエはもちろんモダンなど他のジャンルの踊りも評価されます。毎回、クラスみんなで話し合っレオタード、髪型、髪飾りをあわせませす。バレエはバレエから試験が始まり、たくさんの先生方が見に来るのでほんと緊張します。毎回反省点はたくさんありますが、すべて終わった後の達成感はすごいです！

ハンガリーにはヨーロッパならではの、素晴らしい世界遺産や建物がたくさんあります！有名なくさり橋の夜景は他の国に見られないような温かみがある景色で、小さいことで落ち込んでいられないなと見るたびに思われます。オペラ座の劇場もとても豪華です。一年目に見たときは、その豪華さに圧倒されてしまいました。卒業公演はオペラ座で行われるので、出演できたいなと思います。

今は二年目になり一年目に比べさらに舞台経験が増え、学校内の友達もとても増えて毎日充実した日々を送っています。そしてハンガリー人とのハンガリー語でのコミュニケーションもだいぶスムーズになりました。こっちにきてたくさん悔しい思いや辛い思いもしましたが、それも自分の考え方や成長につながったと思います。本当ハンガリーという国にきてよかったと思います。このハンガリーで学んだことを将来にいかしていきたいです。

そして最後に、ここまで頑張ってきたのは日本の家族、先生方、友達、そしてハンガリーと一緒に頑張ってきた仲間の助けがあったからです。感謝の気持ちでいっぱいです。いつか恩返しが出来ればなと思います。これからも今しか出来ないことを頑張っていきます！

(ましこ・ゆめの)

留学生自己紹介

寄り道留学

ブダペスト工科経済大学経済学部

一戸 宏介

2013年の春学期から、ブダペスト工科経済大学で経済、経営の勉強をしています。一年前はまさか自分がハンガリーで留学することになるなんて思ってもいませんでした。きっかけは、指導教員の一言でした。「若いうちは寄り道をしなさい」。この一言で僕はハンガリーへの留学を決めました。

私は途上国の開発、特に東南アジア地域における貧困問題に関心があり、長期休暇の度に東南アジアに行っていました。大学3年生の後期から留学することを決め、行き先はフィリピンを希望しました。そこで指導教員に相談したところ、「君はアジアしか見たことがないでしょ。それでは考えや価値観が偏ってしまうよ。一度ヨーロッパにでも行ったらどうだい?」と言われました。正直当時の僕はヨーロッパになど全く興味はありませんでした。「ぼくはいまヨーロッパから学びたいことは特にありません」と言うと、指導教員は「それが大切なんだよ。ゼ口から自分の力でなにかをみつけないよ。この寄り道は若いうちしかできないよ。その代わり、するなら全力で寄り道してきなさい。」この言葉に心を動かされ、私はヨーロッパでの留学を決意しました。こうなったら今まで全く気にかけてくたない国で留学をしようと決め、イギリスやフランスなどの



留学先としてメジャーな国ではなく、ハンガリーという日本人にあまり馴染みのない国を選びました。

私の留学先であるブダペスト工科経済大学は、1782年に創立された歴史ある大学

で、ハンガリーでトップレベルの教育水準を誇ります。そうすると、当然協定校も各国のトップレベルの大学となり、優秀な生徒が世界中から集まってきます。そして授業はそんな各国の秀才たちに囲まれながら受けます。授業の内容は一般的な経済、経営に関するものなのですが、教室にはヨーロッパ人、アメリカ人、アフリカ人、アジア人がいます。当然議論は一般的な事象に留まることはなく、次から次へとグローバルな話題に移っていきます。ヨーロッパは現在このような経済問題を抱えているけど、アメリカはどうなんだ?アフリカとアジアの経済を比較して、なにが共通点でなにが相違点なのか?そんな議論がされているときに、不意に「ところで日本はどうなんだい?」と振られることもあり、慌てて僕の知っている限りの知識をもとに、考えを述べます。日本人の留学生は私一人なので、出鱈目なことは言えません。ブダペスト工科経済大学の日本代表として、授業に臨んでいます。

私の趣味の一つに散歩があります。散歩というものはとてもおもしろいものです。普段バスやトラムで何気なく通り過ぎてしまう道も、自分の足でゆっくり歩いてみると新しい発見があります。ブダペストの最大の魅力は、歴史を近くに感じながら生活することだと思います。みなさんご存知のように、通りや駅、広場の名前には歴史上の人物の名前がよく使われています。そういった一つ一つのものに注意しながら散歩をし、気になることがあれば家に帰ってから調べます。なんだかプチフィールドワークをしているみたいでとても楽しいです。これからはどんどん暖かくなってくるので、散歩がより一層楽しくなりそうです。

ハンガリーの国民性に、物を大切にすることがあります。ちょっと街に散歩に出てみると古着屋や中古レコードショップ、骨董品のお店など所謂セカンドハンドの商品を扱うお店がたくさんあります。私はとにかく古いものが大好きなので、そういったお店にたまに顔を出して、掘り出し物を見つけては購入しています。なかでも骨董品屋さんは

留学生

非常に興味深いです。オーナーさんに聞いたところ、店内の商品はフリーマーケットで買い付けたものと、買い取りの依頼を受けたものだそうです。そんな商品を実際に手に取ってじっくり眺めるのが、私のいまの楽しみの一つです。

ブダペストでの生活が始まって、もう一ヶ月以上経ちました。「寄り道留学」ということで、到着直後は一体自分はここで何を学ぶことができるのだろうと不安な気持ちでしたが、そんな不安も今は全くありません。すでに具体的に何かを掴んでいる訳ではありませんが、絶対になにかを見つけることができるという確かな感触があります。帰国までの残り4ヶ月でどんな発見があるのかとても楽しみです。

(いちのへ・こうすけ)

ハンガリー語を勉強

バラシ・インスティテュート

牛山 綾

ブダペストに留学してからもう半年が経ちました。春が来るのが待ち遠しい半面、帰国の時がじわじわと近づいてきたのだと感じ、少し寂しくもあります。

大学で学んできたハンガリー語やハンガリーという国を実際に見てみたい、生活のツールとして使ってみたいと思いブダペストに来ました。私の大学では普通3年次の秋から留学するのが主流ですが、その頃私は部活動にのめり込んでいたため、4年次の秋から留学しようと決めました。留学が1年遅れただけでなく卒業も大幅に遅れそうな勢いなので(お父さんお母さんごめんなさい)、ハンガリーに行くからにはめいっぱい勉強して、めいっぱいハンガリーを楽しむということも同時に決意しました。

私が勉強しているバラシ・インスティテュートではたくさんの留学生たちがハンガリー語を学んでいます。その中に混じって私も日々奮闘しています。日本の大学では主に語学の授業が多かったのですが、こちらでも

留学生自己紹介

語学の授業ではあまりつまづくことはなかったと思います。しかし午後のハンガリー学の授業になると一変、先生が何言っているのかわからない、専門用語が全く見当もつかないという感じてした。ハンガリー学の授業では、文学や歴史、地理、政治社会、言語学、文化など科目は多岐にわたります。中には演劇を見に行く授業や美術館に行く授業もあり、座学だけでなくとても刺激的な授業がたくさんあります。そういった授業を全てハンガリー語で受けるわけですから、慣れるまではとても苦労しました。周りのクラスメイトたちが涼しい顔で授業を受けている陰でひっそり予習・復習して授業に臨む、でも打ちのめされる、のくり返しでした。そんな私でも半年間で少しは成長できたかな、と思える瞬間もあります。今ちょうど歴史の中間テストが終わり、この原稿を書いているところですが、始めの頃より理解できるようになったかも・・・?と実感しています。

学校には生徒たちは留学生しかいないため、ハンガリー人と知り合える機会はなかなかありません。しかし日本語を勉強しているたくさんのハンガリー人と出会って、お互いの言葉を教えあったり、一緒に出かけたり、料理を作ったり、パーティーをしたり、放課後や休日にも充実しています。これしよう!あそこへ行こう!などたくさん誘ってもらって、予定がばんばんというとても嬉しい悩みもあります。

ハンガリーの友人たちと触れ合っただけでもいいなぁと感じることは、おもてなし精神がすごい!ということです。ハンガリー人はみんな自分の国や文化に誇りを持っていて、それを私たち日本人に嬉しそうに紹介してくれます。私にとって今回が初のハンガリー滞在なので、見るもの、食べるものすべ

てが新しく、発見と感動の毎日です。そういった新しいものに出会った時、いつもハンガリー人の友人は熱心に説明してくれたり、食べものはたくさんごちそうしてくれたりします!!!これも嬉しい悩みですが、ハンガリーの美味しい食べものに囲まれて、半年でだいぶ太ってしまいました。また、ハンガリーの人の温かさもたくさん触れてきました。ハンガリー人の輪にぼつんとひとり話も



理解できず、勝手に孤独を感じて寂しかったこともありました。そんなときも、彼らは私がハンガリー人じゃないとかそんなことは全く気にせず、ひとりの友人として向き合ってくれて、いつも私を迎え入れてくれました。私も彼らの気持ちにこたえるために、自分のできるハンガリー語で話をしようと努力してきました。最初の頃はハンガリー人ばかりの中で過ごすときはたとえ遊んでいるときでも緊張しましたが、今では本当に居心地がよく、いい友人たちと出会えてよかったです。

ハンガリーのことを日本の友人に聞かれるととても嬉しくなります。聞かれていないことまでべらべらと喜んで残り話ができません。そういうときに、ああ私は本当にハンガリーが好きなんだなぁと感じます。また、この半年間一度も日本に帰りたと思ったことはありませんでした。ホームシックを感じる余裕すらないくらい重質していましたし、いつも私のことを気にかけてくれる、たくさんの友人とも出会いました。本当に恵まれているなぁと今改めて思います。ハンガリーで出会ったすべての人と日本からいつも応援してくれている家族や友人に感謝しながら、残りの留学生活でもたくさんのことを吸収し、もっとハンガリーの魅力を伝えられるようになりたいと思います。

(うしやま・あや)

留学生

濃厚な留学生活

リスト音楽院器楽科ピアノ専攻2年

藤原 新治

僕が留学を志したのは高校3年の夏の事です。国内の大学か海外へ早いうちに行っで染まるか、進路がまだ定まっていませんでした。そんな中、当時の夏に行われた霧島国際音楽祭に参加しピアノのダンタインソン氏に背中を押されたのと、自分の先生が昔リスト音楽院に留学しており、迷っている僕に留学を勧めてくれたのがここにくるきっかけでした。卒業演奏会を蹴って2月に行われた札幌のセミナーに参加し今の師匠ラントシュ先生に出会うこととなりました。またそのセミナーで僕の音楽人生に大きな影響を与えることとなる人とも出会いました。彼は一回り上の先輩でその方2年もルームシェアすることとなりました。

共同生活をしながら自分の音楽に向き合っていくというのは自分にとってとても難しいものでした。違う人間同士が住むわけです、当然こちらも向こうも納得いかないようなことがあるわけです。そして異国での生活、言葉が上手く通じない、先の見えない不安。眠れない日もかなりありました。そんな優れない気分の日でも練習をしなければなりません。共同生活しているので自分の締まらない練習がすべてとなりで部屋で休んでいる先輩に聞こえてしまうわけです。思いうような音が出せず何回も繰り返しやっていたり、ぼけーっとただ譜面を追っただけの意味の無い練習もすべて。

その時はまあ明日があるから大丈夫だろう、今までそれでなんとかなってきたから、などと考えていました。同居していた先輩はそれを聴いてたから、かどうかはわかりませんが、多くはそういう日に限って外食やお酒の席に誘ってくれました。その席では今日の練習で何を得たかななどよくお互いの反省会をしたものです。とても嬉しかったのは音楽家の先輩として、プロのピアニストを目指す同胞として沢山僕に説教をしてくださいました。ほんとに基礎的な姿勢の事や、練習に向かう態度、なにより彼からピアノ以外の時間に何をするかを教わりました。外を歩

11

留学生自己紹介

いている際にも感覚を研ぎ澄ませて端っこ
の視界に映っている物体、人の移動も把握
する、今どういう空間にいてそれを頭の中
で立体図なるものをイメージし自分がどこ
に位置しているのか常に把握するなど、彼
の考えている事柄ほとんどが新鮮でただが
むしゃらに練習し続ければ
ピアノはうまく
なると信じて
いた自分の考
えが大きく変
わったのはこ
の時でした。も
ちろん男同士
くだらない話もしてそれでリフレッシュ出来
ていい結果を生んだこともあり。去年
夏に彼は帰国し、現在僕は残り2年の大学
課程・2年の大学院課程のあわせて4年を
ハンガリーで一人暮らしをすることになり
ました。辛いことも沢山ありましたが、一人
暮らしを始めて改めてあのルームシェアが
いかに濃かったことかと実感しています。



現在僕はフルタイムBA課程の2年次に

在学しており、主専攻のピアノは2人の先生
に師事しています。お二方とも素晴らしい
音楽家であると同時に、人間としても尊敬
できる方々です。たまに二人の解釈が正反
対で困ることがありますが、一回一回のレ
ッソンはとても充実しています。なによりお
二人共孫のように僕のことを見てしてくれ
るので音楽以外の話もたくさんしていただ
き、生活面でも沢山助けてもらっています。
ピアノ以外の特筆すべき科目はソルフェ
ージュです。コダーイメソッドを基に2年間
で音楽理論・視唱・聴音などの能力を効率
的に学ぶことができます。先生はとても情
熱的な方でたまに血の気が多過ぎて萎縮
するときもありますが、なによりハンガリー
では珍しく(?)休講がほとんどなくコンスタ
ントに、そして綿密な計画を基に授業を勤
めてくれるのでこちらもちろんと学んだこと
が身に付いたという実感しながら学べてい
ます。ソルフェージュは中学・高校と6年間
やってきましたがいまいこれが実際の演奏
に役にたっているかは半信半疑な部分
がありました。今の先生はソルフェージュが
いかに実際に演奏するうえで大事なのかを
ちゃんと説いてくれ、普段から和声進行、リ

ズムを分析しそれを理論的かつ体感的に
会得し自然にそのことが出来るようになる
まで練習を行うというごく当たり前のよう
なことかもしれませんが、これはまさに今ま
でいい練習が出来たと思えた時をうまく説
明しているものでした。それを聞いて今まで
の自分の練習に対する姿勢に反省し、一回
一回の練習に向かう姿勢を改めました。こ
の先生との出会いがなければなんとなく音
楽をやっていたかもしれません。
練習の間にはリフレッシュがてらブダ
ペストの美しい街並みを見に散歩すること
があります。なにごともうまくいかなかない
時などこの風景に何回救われたことか。美
しい建築物や大らかなハンガリー人の国
民性と触れ合っていくうちに自分の音楽に
対する美意識的なものも少しは変わってき
た気がします。聴く人ほとんどに感動して
もらえる音楽を創り出せるように積極的に色
んなものをここハンガリーで見聞して美的
センスを高めていき、いま師事している先生
のように心のそこから湧き出るような、そし
て自然なバランスで音を奏でられる音楽家
になるべく精進したいと思います。
(ふじわら しんじ)

日本人学校

最高のステージ

小学部6年 升谷 泰士

「はあ、はあ、はあ」
今、ハンガリーダンスを終えとても汗をか
いている。僕がこんなに汗をかきことができたの
は今までの練習を一生懸命頑張ったからだ
と思う。昨年も僕たちはハンガリーダンスをド
ナウ祭で踊った。練習時間が長く、ダンスを教
えてくださる先生が日本の方で直接やりとり
ができ、どんどん進んでいった。けれど、今年
は、不安だった。ダンスを教えてくださいと
先生がハンガリーの方で、練習時間が約8時
間しかなかったからだ。
先生と初対面の日。すぐダンスの練習に入
った。ステップは昨年より簡単だったが、ダン
スの構成がとても複雑でみんなの動きがば
らだった。それにハンガリー語の歌も入り、
さらに難しくなった。練習の時に休んでしま
う人が多く、練習時間が少なくなり苦労した
人もいた。
自分たちでダンスのステップを考えるとこ
ろもあり、六年生でリズムに合っているかを
考えながらつくっていった。「先生に言われ

る」のではなくて自分たちで工夫するっていい
な。これがぼくの思いだった。練習を進めてい
くと、息が合ってきて形になってきてとても
楽しくなった。みんな、朝の時間にハンガリー
ダンスの曲を流したり、踊ったりしていた。こ
の調子ならいい演技ができそうだなと思った。
本番まで約1週間。衣装とくつが届いた。実際
に着ていると、練習の時とはちがいがひび
いた。ステップをまちがえたら、すぐわかって
しまうので、今まで以上に気をつけた。
本番2日前。僕たちはしかられた。へらへら
していたり、ステップを忘れていたりしてい
た。僕は、この失敗を繰り返さないよ
うにこのあとの練習に臨んだ。「さっきよりう
まかったが、まだいける」と、先生が言って
くださった。僕は、絶対成功させてやると思
った。
本番前日、IBSでリハーサルがあった。これ
が最初で最後のステージでのリハーサルだ
った。やはり、普通の床とはちがいが、踊る
範囲に限りがあり、ぎりぎりのところで踊ら
なくてはならなかった。だが、みんなすぐ覚
えた。それ

は、みんないい演技をしようと思っていたか
らだと思う。ますます自信がわいてきた。
ついに本番をむかえた。午前中リハーサル
の時から僕は気合が入っていた。リハーサル
が終わり、いよいよ本番だ。僕は急に緊張し
てきた。ステージの上に立ち幕が開いた。言
葉を言い終わって横に行き、肩を組んだ。「よ
し行くぞ」という気持ちでステージに出た。踊
っている時は目線を上にすることやみんなと
息を合わせることに気をつけていた。最後の
時の「タタタタン」がみんなの気持ちがひ
とつになり決まった。2ヶ月半、僕たちが一
生懸命に練習してきた成果がここに表われ
た。このハンガリーダンスを通して、「練習時
間が多ければいいのではなく、一回一回、ど
れだけ心をついにし、一生懸命するかで決
まる」ということを僕は学んだ。
この学んだことを意識し、中学校生活を送
りたい。
(ますたに・たいし)

二つの限界突破

中学部 3年 島戸 崇文

私は最高学年の中学3年生だったからか、
これまでよりも多く様々な活動に取り組み、
新たな出来事に挑戦した。ブダペスト日本
人学校で過ごした約8年間の中でも一番濃
いものになった。とくに、一等星のように
輝いている出来事が二つある。
一つ目は、夏休み明けに開かれた、ハーフ
マラソンに参加したことである。昨年は、
ハーフマラソンを友達と二人のリレーで走
った。しかし、今年は21kmの道のりを一
人で走った。最初はハーフマラソンに参
加するかどうかで迷った。夏休みの間、私
は全く走っておらず、体力が随分落ちて
いたからである。しかし、このマラソンを
逃すと、もうハンガリーでのマラソンには
参加できなくなる。最後に良い思い出を
作るかと21kmを走ることにした。まだ気
温も高い中、残された期間、毎週土曜日と
日曜日には十キロ近く走り続け、体力を
取り戻すことができた。

走れた。ところが、その後に腰と足に痛
みが走ってきた。その痛みのせいで、私
は何度も立ち止まった。「あきらめたら何
も得るものはない、まだ限界に達してい
ない」と自分を励まし再び走り始め、21
kmをなんとか走り切った。タイムは1時
間58分27秒だった。この挑戦は肉
体の限界突破であったと思う。だからこそ、
強く印象に残っている。
二つ目は、運動会で赤組応援団長を務
めたことである。とくに印象的だったのは
応援練習である。練習の際、中学部であ
まり声をかけ合えていなかったり、話し
合いが足りなかったり、教える進行状況
が悪かったりしたからである。先生から
もっと計画を立てた方がいいなどという
注意を受けたこともたびたびあった。ち
ょうど、中三の道徳の授業でリーダーに
ついて学んでいて、団長として自分が中
学部をまとめきれないから一回一回の練
習が重なるのだと気付いたことを覚えて
いる。それからは毎朝話し合いを設けたり、
毎晩練習計画を立てたりした。そのおかげ
で、進行状況や声かけが良くなった。し
かし、これでうまく進

むのかと不安が消える事はなく、夜も眠
れない日があった。そんな不安を抱えつ
つも運動会までに完成させたのを覚えて
いる。応援練習は精神的にこたえるもの
だったが、そのような困難があってもそ
の当日が輝かしいものになったのだと考
える。ハーフマラソンが肉体の限界突破
なら、応援の出来事は精神の限界突破
だと言えるものであった。その過程で
私は何度もネガティブ思考に陥った。し
かしそれらは必ず最後に私に喜び、快
感、そして笑顔をもたらしてくれた。
今後私は、困難に出会っても、嫌な気
持ちで受け止めるのではなく、真正面か
ら全力でぶつかっていくようにしてい
きたい。困難というものは、つらいもの
であるが、その困難をどう解決してい
くかというのが人生を大きく左右する
と私は考える。そして、このことを大
切にし、あらゆる限界突破を目指して
これからの人生を良いものにしてい
きたい。
(しまと・たかふみ)

さくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。
各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグロー
バルな企画・マネジメント展開を行っています。
お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネジメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ/仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.
Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846 Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu web: http://propart.client.jp/



みどりの丘補習校



「感謝」の気持ちを忘れず

渡辺 理絵

私たち家族の初めての海外赴任先はフランスでした。渡仏したとき、息子は小学1年生、娘は幼稚園の年少の夏休み。それぞれ、びかびかのランドセルと園バッグを背負って、桜満開の日本で入学式と入園式を迎えたばかりでした。渡仏にあたり、長男は英語がメインのブリティッシュ系インターナショナルスクールへ、娘は長男の学校と同系列ではあるものの、フランス人と外国人が半々というフランス語がメインの幼稚園に通うことになりました。

夏休み明け、フランスの新学期、親子共に緊張の登校・登園初日がやってきました。はじめての日、スクールバスに乗って、登校する息子の不安そうな小さな後ろ姿を今でも、鮮明に覚えています。しかし、親の心配を他所に、同じクラスに、日本人のお友達がいたこともあり、すぐに、楽しく学校に通うようになりました。長男は、

日本では、息子も娘も、お友達もできて毎日が楽しくてたまらない!という時期に引越したので、親としては、切ない気持ちでいっぱいでしたが、周りの方たちの助けもあり、新しい環境で、前に前に一歩ずつ進んでいくことができました。

フランスで子供たちの学校・幼稚園を選んだポイントの一つは、週に一度、日本語補習があることでした。勉強の時間数としては、充分ではありませんでしたが、日本人のお友達と一緒に学ぶことが、とても楽しかったようです。普段は、英語やフランス語で、なかなか自分の気持ちを伝えられないことも多かったと思うので、日本語クラスでは、本来の自分を出せる大事な時間だったのかもしれない。

娘は、毎朝、幼稚園まで送っていました。最初の頃は、園の玄関の前で、もじもじしていたものですが、元気に、あっさり「バイバイ♪」が言えるようになり、息子もスクールバスに乗る際の後ろ姿がたくましくなってきた頃、日本への帰国が決まりました。フランスに来て3年目のことです。ようやく親子共に、フランスでの生活を楽しめるようになってきた時期だったので、とても名残惜しく感じました。

フランスから日本に帰国する際は、子供たちの学校に関して、日本人が日本に戻るのだから、あまり心配はないと高を括っていました。息子は、外国人の先生も多いイメージのインターナショナルスクールに編入したので、漢字学習など大変な面もありましたが、比較的、すんなり慣れることができたので



アルファベットもろくにわからない状態でしたが、grade 1で入学したので、他の外国人のお友達と一緒に、アルファベットの読み書きなど初歩から、勉強することができました。

娘の場合も、親子共に、フランス語がまったく理解できない状態での入園でした。ただ、はじめの年、娘は午前中だけのクラスだったので、慣れるには短時間から始めて良かったと思います。しかし、幼稚園から親への連絡が、フランス語なので、親は必死に勉強しなければなりません。娘については、同じクラスの日仏ハーフのお友達に助けをもらうことが多かったようです。

ですが、問題は娘でした。逆カルチャーショックというのでしょうか。近所の小学校へ転入したのですが、お掃除当番、給食当番、起立、礼など、何から何まで初めてのことで、とまどってしまったようです。「学校へ行きたくない」と言い出した時は、びっくりしました。幸い、近所にお友達ができてからは、ものすごい速さで日本の学校に馴染んでいきましたが…。毎回、子供たちの順応力には、驚かされます。

日本に帰国して約1年が過ぎたころ、夫の口から、ハンガリーへ



の転勤の話が出ました。また転校です。子供たちにそのことを話すと、「今の学校が好きだし、友達とも別れたくない。でも、お父さんと一緒にいたいからハンガリーに行きたい」と。ハンガリーでは、息子はインターナショナルスクール。娘は日本人学校に通うことになりました。息子は、土曜日は緑ヶ丘補習校の中学2年生のクラスにも通うことにしました。2回目の外国生活ということもあるからか、子供たちの年齢も上がったからなのか、周りの環境にも恵まれ、割とスムーズにハンガリーの生活をスタートできた気がします。

平日はインターナショナルスクール、さらに土曜日に、また勉強しないといけない補習校を、はじめは嫌がっていた息子。行く前は、「行きたくない」とぶつぶつ言っていたのですが、通い始めたら、優しい先生やお友達のおかげで、どちらかというところ、マイペースの息子も、すぐに打ち解けることができたようです。補習校には、あいにく息子の学年のクラスがなかったので、1学年上げて中学2年のクラスに入れてもらいました。勉強面では、ついていくのが大変な時もあると思うのですが、弱音を吐かず、頑張っている。

補習校では、楽しいイベントもいっぱいあり、春の遠足では、まだ通い始めたばかりだったのですが、他の学年のお友達とも仲良くなることができたようです。大盛況のバザーでは、子供たちは、子供ブースで出店。値札をつけたりする準備の段階から、親子共

に、とても楽しい時間でした。大運動会では、娘は日本人学校、息子は補習校で参加し、パン食い競争やリレーでは大興奮。学習発表会では、練習時間が少なかったにもかかわらず、完成度の高さに驚かされたり、白熱した年始のかるた大会など、すべてのイベントが、とてもとても楽しい思い出です。

フランスでも日本語補習の時間がそうでしたが、息子にとって補習校は、勉強だけではなく、本来の自分を出せる場所でもあり、日本人であることを再確認できる場所であり、日本人としての誇りを育くむ場所でもあるような気がします。息子の通っている補習校も、娘の通っている日本人学校も、外国に暮らす子供にとっては、多かれ少なかれ、同じような存在なのかもしれません。

ここハンガリーで、子供たちが、日本文化に触れることができ、日本語学習を続けられる環境があることを幸せに思います。こんな素敵な学校を造ってこられた関係者や先生、そして、温かく迎えてくれた保護者の方やお友達、すべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

この「感謝」の気持ちを忘れず、私たちも、これから先、前に前に一歩ずつ進んでいきたいと思えます。

(わたなべりえ)



幼児サークル参加者募集!

「日本語補習校と同じ校舎で3歳から就学前までの幼児を対象に幼児サークルを開催しています。隔週の土曜日午前中、45分間日本人の先生と一緒に読み聞かせや工作をしています。興味のある方は、ポジヨニpozsoamina@yahoo.co.jpまで」

スポーツ行事・運動サークル情報

バドミントン部

中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動を行っています。毎回参加される方が、運動不足の素人おじさんに加え、女性と子供が数名で合計10名前後です。その他、時々参加される方が10名程います。はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者も数名いるので、初心者への打ち方指導もやっています。

ラケットは会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。参加費は、当面1,000HUF/人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。

興味のある方は軽い気持ちで結構ですので、是非参加ください。会場都合・参加者の都合により不定期に休みもありますので、事前に以下のメールに問合せ頂けると幸いです。

- ① 現在の部員数
大人:約10名(女性も数名)、他に時々参加の方が10名ほど
子供:約2名(他は会場を走り回っています。)
- ② 活動場所と時間帯
日時 毎週日曜日の午後4時から2時間(連休はお休み)
場所 中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)
- ③ その他の活動
ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会
飲み会
- ④ 代表の名前と連絡先
代表: 池田耕平 問合せ先: hujpbad@gmail.com

テニス部

- ① 現在の部員数
日曜日:21名(男性17名、女性4名)
- ② 活動場所と時間帯
日曜日:Match-point tennis Club 午前9時~11時
<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>
- ③ 本年度の実施予定活動
日曜日:テニス以外の各種親睦会(随時)
- ④ 幹事連絡先
伊勢雅尚 メールアドレス:m.ise@idakaeurope.cz
- ⑤ 部員募集について
現在は部員数が多く、2時間では物足りないぐらいの運動量になってしまっている為、基本的に募集をしておりません。但し、『女性で初心者!』という部員が減少しておりますので、そのカテゴリーに当てはまる方は「別途、相談」とさせて頂いております。
是非、幹事までご一報願います。

ゴルフ部

<2013年度の活動、公式行事予定>

- 月例会(何れもPANNONIA Golf Course)
 - ① 3月24日(日)09:00~
 - ② 4月14日(日)08:00~
 - ③ 5月12日(日)08:00~
 - ④ 6月 9日(日)08:00~
 - ⑤ 7月14日(日)08:00~
 - ⑥ 8月 4日(日)08:00~
 - ⑦ 9月 8日(日)08:00~
 - ⑧ 10月6日(日)08:00~
 - ⑨ 11月3日(日)09:00~
- 「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権
第18回(春季)4月中旬~7月下旬予定
第19回(秋季)8月上旬~10月下旬予定
- 第7回PANNONIAワールドカップ:
欧州、アメリカ、韓国、日本選抜 春~夏頃予定
- 第8回四カ国対抗戦:
オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー対抗戦
春~夏頃予定
- 第4回年代別対抗戦:
30歳から60歳までの各年齢層による対抗戦(夏~秋頃予定)

<部員募集>

2013年も3月下旬から活動を予定しています。ベテラン部員が帰国され、現在、部員数が減少気味です。
ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフにご興味のある方は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。
(連絡先:ユーラシア・ロジスティクス 藤井 akihiro.fujii@eur-asia.hu)

ソフトボール大会

- 春季: 5月25日土曜日(雨天順延) 6月1日土曜日
- 秋季: 9月21日土曜日(雨天順延) 9月28日土曜日
- お問い合わせ:在ハンガリー日本商工会事務局
shokokai.bp@gmail.com



日本人音楽・芸術家出演コンサート・イベント情報

■長内 裕美(現代舞踊・文化庁派遣研修生)

4月12日(金)・13日(土)20:00開演
会場:Átrium Film-Színház <http://www.atriumfilmszinhaz.hu/>
国内外で活躍するハンガリー人振付家、Ferenc Fehérと、文化庁の在外派遣制でブダペストに滞在中の長内 裕美さんコンテンポラリーダンスのデュエット作品。Fehér氏の独特な世界に引きつけられ、3年越しに共演が実現。ブダペストで公演後、ハンガリー国内各地での上演も予定しています。
映像ダイジェスト <http://youtu.be/YuKhUttriCk>



■山本 千愛(ピアノ)リスト音楽院大学院ディプロマコンサート

4月22日場所:旧リスト音楽院 19時開演 入場無料
曲目:モーツァルト: ピアノソナタ第13番 変ロ長調 K.333
リスト: 巡礼の年報 第2年イタリアより ペトルルカのソネット
リスト=サン・サーンス(ホロヴィッツ編): 死の舞踏S.555 R.240
ショパン: バラード第4番 へ短調 作品52
バルトーク: 舞踏組曲Sz.77



■十川 安里(ピアノ)リスト音楽院大学院ディプロマコンサート

5月24日(金) 旧リスト音楽院 19:00開演 入場無料
曲目:ハイドン:ソナタ No.59 Es-dur
シューマン:子供の情景
コダーイ:ピアノのための7つの小品
シューマン:ファンタジー



■上杉 典子(ヴァイオリン)リスト音楽院学士
野間里保(ピアノ)リスト音楽院大学院ディプロマコンサート

5月29日 場所:ドナウ宮殿(Duna Palota) 16:00開演 入場無料
曲目:パッハ:ヴァイオリン ソロソナタ 2番
ベートーベン:ヴァイオリンソナタ.6番(ピアノ・野間里保)
シューマン:謝肉祭 作品9
シベリウス:ヴァイオリン協奏曲
ラフマニノフ:パガニーニの主題による狂詩曲 作品43
共演:ドナウ交響楽団



■井上 奈央子(ヴァイオリン) アニマ ムジツェ室内合奏団メンバー

) 4月28日(日)19:00開演 オーブダ集会場(Budapest III. Kiskorona utca 7.)
共演:クレニエーン・チャバ(クラリネット)
曲目:モーツァルト: クラリネット協奏曲、ヒンデミット: 変奏曲、その他
) 5月7日(火)19:00開演 ナードルテレム(1146 Budapest, Ajtösi Dürer sor 39.)
曲目:シューマン:3つのロマンス、ブラームス:スケルツォ その他
) 6月20日(木)19:00 オーブダ集会場
アニマ・ムジツェ室内合奏団 3周年コンサート
曲目:当日のお楽しみプログラム



ANIMA MUSICAE
3 éves
Születésnap koncert
2013. június 20. (csütörtök) 19 óra
Óbudai Társaskör
(1036 Budapest, Kiskorona u. 7.)
www.animamusicae.hu



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円 (税込) A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行—橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

